
ライフライブ

タカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライフライブ

【Nコード】

N2119B

【作者名】

タカ

【あらすじ】

とある普通の高校生が殺人事件の現場に立ち会ってしまふ。そこで血だらけの少女と出会い・・・、そしてオタクキーな美人弁護士とその殺人事件を解決していく！

第一章「助けて下さい」

2006年4月16日朝

千葉にある高校に通っている荒波一は何事もなく高校生活を過ごしていた

どこにでもいる普通の高校生であると俺はいつも思っている。が同時にこのいつもと変わらない生活に飽きてしまっていた。何か面白い事ないかなあ~~~~ってまあ高校生の悩みてのはたいていそんなものなんだろうけど・・・と四限目のつまらない授業中に外を見ながら荒波は思っていた。学校が終わり、俺の地元である松戸にある馬橋まで帰ろうと電車に乗った。この日はクラスメイトの勝間と話し込んでいたため8時に馬橋駅についてしまった。

「ううだるいなあ」

と思いつつ、駅に止めてあるチャリに乗り、俺の家がある住宅街へと向かっていた時だった。

ある叫び声が耳に聞こえた。帰り道にある公園からだった。

今思えば気のせいとして真っ直ぐ帰れば良かったのだ。何故俺はこう興味をもってしまったんだろうと後になって後悔する。

俺は自転車の向きを変えて公園の方に進める。

公園の中にチャリを置き入ると俺はその光景を見て愕然とし、足がすくんでしまった。

公園によくある砂場の上で20代くらいの男が胸に一本、頭に一本ナイフが刃が深く刺さっていた。やけに砂場の上にあるライトが血を光らしていた。血が流れすぎて砂場はまるで血の池が出来ていた。だかさらに驚いたことにその血だらけの砂場に座りこんでただ呆然と男の死体を見ている少女がいた。彼女はこちらを見て悲しげな目でこう言った。

「助けて下さい・・・」

俺はこの少女に会って全てが変わってしまった。

新たな出会いはまた新しい出会いを生んでいく。

俺は何も答えられなかった俺はとにかくすぐに警察に電話した。

最近の警察はとても迅速のようです三分くらいで一人のお巡りさんがとんできた。そのあと何台もパトカーが来た。俺は第一目撃者として警察につれていかれた。あの血だらけの少女も。俺は千葉県警の取調室に入り、座って待っていた。これから刑事から事件について聞くなり。すると眼鏡をかけた若くイケメンな男性が入ってきた「こんにちは。千葉県警の風岡です。君は荒波一君だね？」

「はい」

「ごめんね、待たせて、警察って仕事めんどくつて（笑）」
と爽やかに言う。この人大丈夫か？

「まずあの女の子の事知ってる??」

「すみません、知りません。あそこで初めて会いました」

「んゝ困ったな・・・」

風岡は頭を少し掻きながら

「あの女の子ねえ、何故か全く記憶がないんだよ」

「どういう事ですか?!」

「事件のシヨックが大きいせいか記憶が全部ぶつとんでるんだよねあゝ。しかもおかしい事に名前も住所も親の事もね」

俺はとんでもない事にまきこまれたとやっと理解した。だか今だどんな事件がよくわからないのだ。はつきりさせないと不安な気持ちになる。

「すみません、事件について知りたいです。ダメかも知れませんが教えて下さい!」

俺は風岡さんの目を見た。

「いいよお」

と微笑みながら風岡は話し出した。なんて軽い感じの人なんだ。

「事件が起きたのは七時半、被害者は土井薫、28才、職業は警察官、」

「警察官なんですか?!」

「そ、で話の続きだけど今んところ容疑者があの少女しかいないんだよ。あの娘服は被害者の血だらけだしさ、腑に落ちないのが被害者に刺さってたナイフから指紋が全くなし・まさにお手上げだよ（笑）」

笑えないですよと心の中で思った。「あの女の子は??」

「もちろん警察が保護。てか確保かな??まあ重要参考人は確かだからねえ〜。とりあえず聞きたいのはあの娘の友達なのかなんだけど違うみたいだしなあ〜。こんな時間だし、家の人には事情話しといたから。あとまた後日呼ぶからよろしくねえ〜、」

「わかりました」

「あとくれぐれも事件に首つっこみ過ぎないように。まだ犯人はあの娘と決まったわけじゃないしね」

と笑いながら言ったが目は真剣だ。俺は頷き、警察署をあとにした。

第一章「助けて下さい」(後書き)

好きに書いたんで読んで下さったら幸いです(＜|＞)

第二章「紙切れ」

あの事件から一週間後。

家にあの風岡刑事からもう一度県警に来てほしいと連絡があった。親は俺の事を心配していたが自分でも不思議なくらい落ち着いているのだ。

あんなに酷い死体を見ているのに。

あの事件は大きな事件としてテレビなどで騒がれている。

なんせ被害者が警察官で、しかも犯人が10代の少女なんて言ったら、マスコミのネタとしてはうってつけだろ。日曜の朝のテレビを見ながらパンをかじっていた俺はそう思った。今日は県警に行くためにこの有意義な日曜を潰して、行かなければならなかった。最初に行く気0だった。が風岡刑事は電話の最後に

「そうそう、あの娘に会わせてあげるよ。僕らが質問しても何も答ええないし、進展ないし。で、もしかしたら同年代の君にだけなら話してくれるかも(笑)」

と笑いながら言われた。俺はこの人はかなりのバカで仕事のプライドが全くない人と認識を変えた。まあ何よりあの娘に会えるという事が俺の足を早くさせた。

正直、まるでドラマや漫画にあるような殺人事件に本当に自分が巻き込まれたか不思議でたまらない。

あの殺人事件を目撃し、発見したのは俺という事はクラスメートは誰も知らない。平凡な毎日をもた過ごしている。人に言いたい気持ちがあったのだから、あの忌ま忌ましい酷い光景を思いだしたくなかったし、いろいろ聞かれるのもいやだ。こんな事早く忘れようと思うのだが、俺の頭ではどうしても消えない事がある。それはあの記憶がない娘に

「助けて下さい。」

と言われた事。あの時俺は何も出来ず、ただ座り込んでいたのだ。

本音は逃げたい気持ちがいっぱいだった。彼女の願いを俺は何も答えなかったのだ。答えてあげたい。

「助けてあげるよ。」

俺はあの娘は殺人犯じゃないと思っている。根拠はないけど・・・。そんな事思いながら警察署に着いた。考えこみながら歩く癖直そう・・・。帰り道がわからない・・・。

中に入ると休憩場所でコーヒーをのんでいる風岡刑事がいた。

「やあ、荒波君、会いたかったよお！」

「はあ・・・」

俺は会いたくない。

「とりあえずこつちおいで」

ついていくとある部屋に入った。どうやら取調室らしいだが俺の目の前にはあの娘が座っていた。しかし頭にはぐるぐると包帯が巻かれていた。

「風岡さん、どういう事ですか?！」

「違うよお。彼女ね、頭を何かで叩かれていたんだよ。でも彼女あまりに普通だったから気付かなくてねえ(汗)」

俺は風岡さんを睨みつけた。

「まあいいから話してみい?僕は監視役を兼ねてるからよろしくね。」

風岡さんは椅子に座りメールを打ち出した。監視サボってんじゃない。とりあえず俺は彼女の前に座った。

俺が彼女に気をかけていた事がようやくわかった。長く綺麗なロングヘアで顔立ちはアイドルなのかもしれないくらい可愛い感じの人だ。ただ事件のショックのせいだろう、元気がない。

「こんにちは。」

「・・・」

返事がない。

「えっと俺に言った事覚えてる?」

彼女は縦に首をふる。

「頑張ってみるよ。お願いされたらやるしかないし。」

彼女はこちらをみて優しく笑った。俺はこの時絶対助けようと思った。同時に完全に一目ぼれだとも思った。

俺が立ち上がると

「ナンパは終わったあ??」

と風岡さんはこちらを見た。

「ナンパなんかじゃないですよ。」

「まあいいや。今日は帰りなよ！僕が全力で頑張って彼女を留置所から出すよ（笑）」

笑いながら言うなよ！

「じゃあ、さようなら。」

「待って、ここに行ってみ??」

風岡さんはポケットから紙切れを渡してくれた。

「どうせ今から暇でしょ？ならここに行ってみ？僕の昔の彼女がいるからさ（笑）」

俺は渡された紙切れを破ろうとした。

「大人の話を最後まで聞こうよお（泣）」
知るか馬鹿刑事！

「彼女なら君とあの娘を助けてくれるからさ」
とウインクされた。気持ち悪かった

しかしながら風岡刑事の紙切れの場所へ俺は行く事にした。

第三章「自由とオタクの弁護士」

俺は警察署を出ると、ポケットの中にある紙切れを出し、どんな物が確認するとそこには地図が書かれていた。

「えつと場所は・・・柏？？随分俺ん家と近い場所なんだな。」

と思いつつ、とりあえずわからない帰り道を俺の勘で足を進めた。もう時間はお昼過ぎ。なんとか近場の電車を捕まえる事ができ、柏駅へ行くための電車に乗れた。

俺は風岡刑事いわく

「昔の彼女」

に会いに行くわけだが、頼りにしていいかわからなかった。それに俺は風岡刑事の言葉に深く考えさせられていた。それは警察署を出る時の事、風岡さんは

「荒波君、彼女の目の前では言えなかったけどさ、彼女ね、無痛症かもしれないんだよ（汗）」

「無痛症？？どういう事ですか？？」

「簡単に言つと彼女は痛みを感じる事が出来ないんだ。僕ら人間は神経一本、一本、体のどれを動かせばいいかプログラムされてるんだ。だけど彼女は、『痛み』と言う神経が麻痺してる為、彼女は頭を何で殴られようがへっちゃらなんだよ（笑）」

簡単に言えてねえよ！それに

「どうしてそんな事がわかるんですか？」

「彼女を病院に連れていつてあげたんだよ。彼女の怪我は二週間ぐらいかかるのに、こんな平気なのはおかしいってお医者さんは言っていてね。まあおかげで彼女は捜査線から外れて、殺人犯から重要人物に格下げしたんだよ。」「本当にいろいろありがとうございます。でもこんなガキが事件が首を突っ込んでいいんですか？最初はダメだって・・・。」

「君のあの娘を助けようと言う心に惹かれてさ。だから僕は全力で

君に協力する事にしたんだよ（笑）」

俺は風岡刑事のもの凄く気持ち悪い言葉と笑顔だなと感じながら外に出たのだ。

「痛みと記憶がない悲劇の少女ね……。ドラマみてえ」と電車の中で呟いていた。

俺はたとえどんな少女だとしても助けたい気持ちは変わらない。それに今の俺には何も出来ない。でも出来ないといって何もしないのは俺はいやだ。今はこの紙切れの場所に行くしかないと決意を固くした。3時半。柏駅から歩いて紙切れに書かれた場所へ向かった。

地図いわく柏の駅周辺で駅から約10分北に歩いてタマローコンビニの上と書いてある。随分変な名前な……。俺はそのコンビニらしき前で止まった。

「ここかな？」

俺は地図と照らし合わせた。確かに場所は合つてると思うが、コンビニはシャッターが降りてるため、看板しか見えない。上を見ると

『夜井法律事務所』

と書いてあった。

「夜井法律事務所？？弁護士を俺に紹介されても意味ないよ……」
と思いつつも、コンビニの横にある階段を上がって事務所へ。

俺はもちろん法律事務所なんか訪れるなんて思ってもいなかったのだから緊張している……。とりあえず中に入る事にし、俺は勢いよく中に入った。

衝撃だった。部屋は少し横長で大きく広がっていた。会社のオフィスを思わせる事務所用のテーブルなどさすが法律事務所だと思った俺は人生最大の後悔をすることになる。

よく見ると壁にはアニメの美少女達が微笑んでるポスターがずらりと張られていた。本棚は六法全書と事件用のファイルらしいものと様々な漫画らしき本……。さらには至るところにロボットのプラモデルが並べられていたのだ。テレビは何故か三台あり一台はつねに

何かのアニメが流れている。それに床にはカップ麺やらお菓子の食べ残しが散乱していた。

俺は本来の目的を思いだし

「すみません！！誰かいますか？！」

とテレビの音量に負けなくらい大声をだした。すると部屋の片隅でもぞもぞと布団が動きだし、それは立ち上がった。

『自由とオタクの女神』それが彼女、いや夜井姫菜に対する俺の第一印象だ。彼女はたぶん美人コンテストでぶっちぎり優勝の美人だろう。足がとても長くジーパンがとても合っている。まるでモデルのようだ。しかしアニメの絵が書いてあるＴシャツのせいで美人で凛々しいオーラが完璧に打ち消されている。寝ぼけた顔の美しいオタッキーな彼女は俺に向かってこう言った。

「誰？あんた？？」これが俺の変わらない面白くない毎日を大きく変えていったのだ。

第四章「高校生と弁護士の契約」

「荒波一です。」

俺は彼女の質問に答えた。彼女は寝起きのパジャマ姿、頭の寝癖も酷い状態でいかにも怠そうな感じだった。

「ちよつと待つて、着替えてくるから」

そう彼女は言い残すと事務所の奥へと吸い込まれていった。

「あの人が、この事務所の弁護士さんか？」

俺は頭の中で想像していた人は男で眼鏡をかけていて、いかにもがり勉強ですよという人を頭の中で描いていたのだ。まあこの変な趣味からして、まともな人ではないと感じていたわけだが・・・

俺が考えにふけていると、全くといって別人のような彼女が事務所の奥から現れた。

くしゃくしゃだった髪をポニーテールにし、黒い女性用のスーツを着ている。よく顔を見ると美人である事は間違いない。また体型は女性雑誌のモデルさんに負けなくらい綺麗だ。

俺は彼女の姿に思わず見とれてしまった。彼女は彼女専用のデスクに座り口を開いた。

「私は夜井姫菜。26歳。職業は弁護士。趣味はプラモデル作り。お勧め漫画で『突撃機関車トマス』よ。アニメは、ほぼ全部大好きよ」

俺は確かにあんたの事は知りたいが、あなたそこまで聞いてねえよ！と俺は静かに心の中で叫んでいた。

「で、何であなたはここにいるの？」

彼女はこちらを真っ直ぐ見た

「俺、助きたい人がいるんです。」

「それで私の所に訪ねてきたわけね？誰からの紹介なの？」

「千葉県警の風岡刑事さんから・・・」

「風岡あ??あのマザコン刑事の野郎、私をまた巻き込むつもりか

しら」

と夜井さんは頭を抱えていた。

「とりあえずどんな話なのか私に全力で話さない」

全力の意味がわからないが、とりあえず俺はこれまでの事を包み隠さず話した。

夜井さんは本当に頭が良い人なんだと感じた。聞き上手というべきだろ。彼女は冷静に話を聞いてくれた。彼女の頭には俺の話を聞いて何を思ったのだろうか。

俺の話を聞き終えて、しばらくしてから夜井さんは口を開けた。

「まずいわね……。その記憶がない美少女ちゃん是不利な状況よ」

「えっ?!でも風岡さんは大丈夫って……」

「いい?今回あなたが巻き込まれた事件はとても大きなものよ。そこは分かってる?」

「もちろん分かってますよ。」

「警察つてのは世間体を異常に気にする体質なの。警官が殺されたつてのは警察にとっては大きなダメージよ。」

そこで挽回のため少しでも可能性がある者を探すわ。あなたの話を聞く限り、疑いがあるのはその記憶がない子だけになるの。あれから随分時間がかかっているのに、何の手掛かりも見つかからない。容疑者も定まらない。もしこのままこの状態が続いたとしたら、私が警察側ならその娘を起訴する事にするわ」

「何を言ってるんですか?!彼女はアリバイはないですけど、彼女は頭を誰かに殴られてるんですよ?」

「その美少女、確か無痛症って言ってたわね」

「はい、そうらしいですけど?それがなにか問題が……」

「大問題よ。いい?常識的に考えると、10代後半の少女が、警官

を殺害出来るかしら？まず、無理よ。力の差が違っわ。でも、彼女は無痛症というある意味、その力の差をうめてくれる体質がある。彼女は頭を殴られようが痛みを感じる事はない。つまり被害者はどんなに抵抗しても、彼女の前では無意味と証明出来てしまうの。『彼女の頭の怪我は被害者を襲った時に、被害者が抵抗してつくったものです』って話せるしね」

俺は言葉を失った。確かに夜井さんの話してる事は正しい。だけど俺にはあの娘が簡単に人を殺せるような人とは思えない。

「何、暗くなってるのよ？誰も助けられないなんて言ってないじゃないからね。」

「じゃあ助けられるんですか？！」

俺は期待の眼差しで彼女を見た。

「当たり前じゃない？でも助けるためには私達が頑張らないといけないわ。」

「俺達が頑張る？」

「そう。彼女を助ける方法は一つ。頑張って真犯人を捜して、私達がそいつを裁判所に突き出してやるのよ」

と満面の笑顔で俺に言った。

口で言うのは簡単だが、かなり難しい事である。だがどんなに希望が小さい話でも、希望がある話という事には変わりはない。俺はあの娘を助けられるのだと思い、自然に嬉しさが心に駆け巡った。「それでいくらで私と契約してくれるの？あなたは記憶のない美少女ちゃんの代理人でしょ？この場合依頼料の請求はあなたでいいのよね？」

夜井さんの言葉で俺はフリーズしてしまった。そうだ。世の中は何事もお金が必要なのだ。今頃、気付く俺をただのアホと言われても仕方ない。

確か俺の財布にあったのは、約6500円くらい……。一般高校

生の所持金なんてたかが知れてる・・・

「しょうがないわね」。依頼金はあなたがここでバイトして払いなさい。そうすれば大丈夫でしょう?」

夜井さんは笑って真っ青になっていいる俺に言った。

「ありがとうございます!俺一生懸命頑張りますよ」

「じゃあ契約成立ね。」

夜井さんは右手を差し出した。

「はい。よろしくお願いします」

俺はその手を握った。

「さてと、あなたはもう帰りなさい。明日から学校でしょう?学校が終わったら真っ直ぐ事務所に来て、色々手伝ってね。明日から本格的に動くしね」

「分かりました。じゃあ今日は失礼します。」

「バイバイ」。

と夜井さんは手を振った

俺は帰り仕度をして事務所を出た。

外はすっかり夜になっていた。俺はこの人に会えてよかった。あの娘を助けられると心の中で思いながら帰り道を歩んだ

第四章「高校生と弁護士の契約」(後書き)

少し話を訂正してもらいました。

ご理解よろしくお願いします

第五章「調査開始」

月曜の朝。俺は変わる事のない通学路を歩んでいた。この高校生活は事件が起こる前の俺にとっては、正直楽しくはなかった。別に友達が好きとか勉強が好きなどのそんな理由ではなく、何も変わらぬ毎日が嫌いだったのだ。しかし、今はどうだろう？少なくとも俺の環境は急激に変わろうとしている。俺はこの急激な環境変化に耐えられるのだろうか？

そして毎日がとても好きな人間になれるのだろうか？

なんてくだらない考えに浸りながら、5限目の授業中に思いつつ、居眠りを満喫していた。

放課後、帰り支度をしていた俺に話し掛けてきたのはクラスメートの勝間だった。

「今日、カラオケ行かない？？可愛い女子も来るらしいぜえ？」

「まじで、じゃあ俺も・・・」

言いかけた俺の頭に夜井さんの顔が浮かんた。

「その、えっと、ごめん。今日大事な用があつてさ・・・」

「そっか、わかった。てかお前最近なんかおかしくないか？いつもだったら喜んで行くじゃん？」

勝間は不思議そうに言った。

「まあね。でも俺、もう行かなきゃ。」

「じゃあな。」そう言つて俺は教室から駆け出していった。

事務所に着いたのは午後四時半。学校が終わったのは三時半。一時間ここまで来れた。事務所のドアを開けて中に入ると、またアニメが流れていた。てかなんでテレビが三台あるのだろうか？？気になるな・・・。

「すみません、荒波ですけど。夜井さん、居ますか？」

「・・・・・・」

どうやら留守のようだな。

しょうがない、待つ事にしよう。そう思いつつ、俺は椅子に座った。しかしゴミが散らかりすぎて、とてもまともに休む事も苦しい。ロボットなどのプラモデルやフィギュアなどは綺麗に棚に整理されているのに、何故かお菓子や食べ残しは大量に溢れている……。よくこんなんで事務所なんて開いたな。

俺は部屋を見回し、

「よし、暇だし片付けでもするかぁ」

と俺はこのゴミ屋敷の片付けを始めた。

どれくらい時間をかけたかな？俺は30分くらいで出来た俺の實力に素直に驚いた。大体は片付き、部屋は見違えるほど綺麗になった。さすが掃除上手な俺。

すると誰かが入ってくるドアノブの音が聞こえた。夜井さんやつと帰ってきたんだな。

「遅いじゃないですか？夜・・・？」

入って来たのは違う人だった。

見知らぬ女性だった。

歳は若い人で俺と同年代かなと思う。

服装はカジュアルな感じで服装は水色を強調してる。リュックサックを背負っており、

片手には何故かノートパソコンを持っていた。またニット帽を被っており眼鏡をかけている。髪はショートでとても似合っていた。この人かなり可愛い人だ。てか、何でこんなに可愛い女性がコロコロと目の前に出てくるんだよ？ここはアイドル育成所か？とにかくこの人は夜井さんの依頼人かもしれないな……。俺がそう考えていると彼女は表情を変えずこちらを見た。

「えつと夜井さんは・・・」

「彼女は裁判所で身元不明者の弁護の申請が終わり、現在留置所で彼女と面会中です。」

「そうですか・・・。」

俺は納得しながら片付けを再開した。

ん？待てよ。何でそんな事知ってた？この人は。俺はもう一度振り向いて

「すみません、どちら様ですか？」

「私は王間冬実。夜井弁護士秘書を担当している者です。」

へえ、あの人に秘書がいたなんて驚きだな。確かにそれなら話は繋がるな。あの人見た感じ自分のスケジュール管理出来なさそうだし。

「あなたは荒波一さんですね？」

「あつ、はい。そうですよ。」

「夜井姉さんから伝言メールを受け渡っています。」

そういうと王間さんは自前らしいノートパソコンを開いた。そのディスプレイにはこう書かれていた。

『私は警察とあのマザコン刑事に聞きたい事があるから、あなたは今から冬実ちゃんと一緒に千葉の市立病院に向かってちょうだい。調べてほしいのは、あの記憶のない少女の名前と家族構成。家族の身元が判ったら私に連絡を。冬実ちゃんが知ってるから。ごめんね。一緒に調査出来なくて・・・』

P・S

あとあなたは、学校を3日間ぐらい休みなさい！あなたの親にはもう話をつけといたから心配はいらないわよ。じゃあ、眼鏡っ娘とのドキドキデート&二人きりの旅を楽しんでね！！

夜井姫菜より』

「・・・」

俺はフリーズしてしまった。王間さんは表情を変えず今だにこちらを見ている。そんな顔でじっと見ないで下さいよ・・・俺なんかじゃ確かに貴女と比べれば、月とすっぽんですけどね。

問題はもう一つ。そう、俺の親だ。俺の親が無断に学校を三日サボ

るのを許すわけがない。てかあんた、俺ん家の電話番号知らないだろ??

そんな事を考えていると俺のポケットの中にある携帯から電話がかかってきた。俺の悪い予想は的中。。親からだった。

「はじめちゃん!! あなた、あのエリート弁護士の夜井さん事務所でアルバイトしてるの?! 母さん鼻が高いわ!! あなたが弁護士になりたいなんて気付かなかったわよ。それに弁護士のための訓練研修旅行に行くから4日間ぐらい九州に行くらしいじゃないの? お金は払ってくれるらしいし、行ってきたさい。今からも九州行きの飛行機でしょ? ごめんね、電話しちゃって。それじゃ気をつけてね」と電話を切られた。

「・・・」

俺は自分の親に呆れて物も言えなくなってしまった。。夜井さんは一体何者なんだ?? 俺の親にどうやって話せば、こんな見え見えの嘘を信じられるようになる?? 俺は世の中解らない事だらけだと理解して無駄に考えるのを止める事にした。

すると王間さんはノートパソコンを閉じ、自前のリュックサックに入れた。そして口を開き、

「荒波さん。その病院へ行きましょう。夜井姉さんの頼みなんて珍しいです。あの人はいつも個人で事件を調べるんです。人と協力なんて今までの行動とは明らかに異例です。」

俺は王間さんの言葉をうけ、夜井さんが自分を信頼してくれてる事をとても光栄と感じてしまった。

「もちろん行きますよ。俺もあの子の事知りたいですしね。」

こうして俺と王間さんは今から病院へ向かう事にした。

――千葉県警察所内――

夜井姫奈は所内の相談所である男を待っていた。

「姫奈ちゃん!! お久しぶり!! (笑)!!!!!!」と満面の笑みを

浮かべながら風岡は彼女に歩み寄っていく。夜井は一步離れて

「あんた、私をそんなに巻き込みたいの？それに、さっき電話で頼んだ事件の書類はどこ？」

「これだよ。」風岡は彼女に渡した。

「ありがとう、で今回、あなたはどっちの味方？」

「ん〜、今回は君の方だよ。久しぶりに面白い事件だし（笑）」

「あなた、上の方に彼女が無痛症ということを申告してないでしよう？」

風岡は常に爽やかな笑顔から一転、深みがある笑顔に変わった。

「外のカフェで話をしよう」夜井は頷き、風岡の指示に従った。

「さて、あなたは何処まで知ってるの？」夜井はきつい目で彼を睨んだ。

「良かった。いつもの君に戻ってるね。荒波君に行かしといて正解だな。彼、結構熱い男だね？そう思わない？オタク弁護士？」

「質問に答えなさい」

「あの例の事件以来、君はまるで枯れた花のように萎んでいた。どんな事件も自分が解決する意欲があった。僕が作る理想の中で君は欠かせないキーパーソンだったんだよ？（笑）」

夜井は席を立ち、帰ろうとした。

「わかったよ、君の質問に答えるから帰るんじゃない」風岡は真面目な顔で夜井を見た。

「で、あなたのキモい理想の話はしないで。それで、知ってることは??」

「被害者の土井薫は最初首を絞められた後、胸にナイフを刺されている。それにその後、再びナイフで腰部分を深く切られていて、最後に頭にナイフを刺しているんだ。」

この情報は夜井の持ち合わせている資料には書いてはいないことだった。風岡は話を続けた。

「警察は例の少女の名前はまだ分かってはいない。彼女を捜してい

る搜索届けも提出されていないのと、近所の住民やまた高校、中学などの教育機関に聞き込みをしても無意味だった。彼女の身元捜査は難航を極めているよ」

「ありがとう。それと、被害者と仲良かった警察官と現場に駆けつけた全員の警官の資料が欲しいんだけど??」

「さっき、渡したファイルの中に全部入れといたよ。君がそう言うと思ってるね（笑）」

「さすがね。じゃあ行くわ。」

「最後にさ、僕と会う前に、姫奈はあの記憶がない子と面会したでしょう?何を話したか教えてよ?こんなに情報を与えたんだしさ」

「荒波一君は貴女を助けるために全力でがんばってるから、安心していなさい。だって彼は数々の事件を解決した有名な名探偵なのよ。って話したのよ。」

風岡は腹を抱えて笑い出した。「あははははは!!君も良い嘘つきだな。高校生探偵?どっかのマンガの主人公じゃあるまいし（笑）」
「さようなら。聞きたい事があつたら私から連絡するわ。」夜井は不機嫌そうにその場を立ち去った。

しばらくして風岡は所内に戻り、例の少女の機嫌を窺った。
彼女は幸せそうな夢をみるかのように、彼女の部屋にある窓を眺めていた。

第六章「彼女の名前は」

俺は王間さんと千葉市立病院を訪れるため病院へ向かった。病院までの道は俺が携帯で調べて、柏駅から千葉駅であり、駅を下りた時外はもうすっかり夜になりかけていた。

病院への道を近所の住人に聞き、俺達は黙々と病院へ歩いていた。そして今、俺はとてもイタイ状況にいる。

その原因は俺の隣で一緒に病院へと歩いている王間さんだ。

ここまで来るのに二時間。俺は彼女と全く話さないでいる・・・。

俺は人見知りをしないタイプだし、人と話すのは大好きなほうだ。最初は気軽に話そうと思い、なにか話を切り出そうとしたがなかなかタイミングが掴めず結局、終始無言状態なのだ。

はあ・・・なんか気まずいな・・・何でもいいから質問して話を盛り上げよう・・・

そう思っていた時だった。彼女は表情を変えずにこちらを向いた。

「私に何の質問をしたいんですか」

この人はエスパーかよ?! なんて俺の考えたことが分かるんだ?

「顔に書いてありますよ。」

俺はそんなに表情がわかり易い顔してるのか・・・いや質問したい顔って何なんだよ?

「その・・・職業は学生さんですか?」

「大学生ですね。」

「あなたもバイトで夜井さんの秘書やってるんですか?」

「いえアルバイトではなく、私は正社員です。」

あんなオタク系趣味が盛りだくさんの事務所でよく働こうと思ったな。確かにあの変な趣味を外せば、法律事務所という社会的に名高いわけだし、働きたい気持ちも分からなくもないけど・・・。

「実際、法律事務所にはアルバイト制度はあまりありません。法務関係の仕事はちゃんと法律を学んでいて資格がある人じゃないと法

律違反なんですよ」

「へえ、そうなんですか・・・」
「って俺法律違反じゃん。」

「あなたは法律をもう違反してますけど、そこは目を瞑ってあげましょう」

「すみません」

何故か謝ってしまった。俺正直この人苦手なタイプかもしれない。

「着きましたよ」

着いたのは一般的どこにでもあるような病院だった。俺達は病院の中へと入った。

「まずこの病院のナースステーションで尋ねましょう。あそこは患者の記録を管理している場所でもありますから」

「分かりました」

俺は頷き、6階にあるナースステーションへと向かった。

「あと教えときたい事があります」

「あなたはただの一般人ですので、適当に嘘について情報を聞いてください」「俺が？王間さんが聞いた方が問題ないじゃないですか？」

「夜井姉さんからあなたがちゃんと調べないと、バイトの意味がない。だけど一人じゃ心細いだろうからあんたが行って彼のサポートだけしてあげてと言われています」

「うう・・・言い返せない・・・。俺は洪々自分でどうにかする事にきめた。」

「この病院で無痛症で通院していた患者さん？」
看護婦さんは目を丸くした。

俺は馬鹿正直に質問してしまった。「この病院で無痛症で通院している患者さんはいますか？」と。

「ちよつと患者さんの事、教えられないですし、多分この病院でそのような症状の人は通院していませんよ？」そりゃそうだ。

「ちよつと待つて下さいね」と看護婦さんはパソコンで調べてくれていた。なんて優しい看護婦さんだ。

王間さんは何をしているかというと、何故か黙って看護婦さんが使っているパソコン画面を俺の横で見つめていた。

「えつと・・・あつ、東京の方では通院者はいるらしいですよ。これ以上はちよつと言えないですね」

「わかりました・・・わざわざすみませんでした」

と俺は頭をさげて病院を後にした。

俺達は病院の近くにあるレストランで夕食を済ましていた。

「はあ、どうしよう・・・夜井さんに合わせる顔がないや・・・」

「いえ、あなたは期待以上の仕事をしてくれましたよ」らノートパソコンを取り出し、ものすごい速さでキーボードを打ちだした。そして打ち終わるとパソコン画面をこちらに向けた。

そこには俺が知リたかった事が書かれていた。

「彼女の名前は桃原空奈^{ももはらのそらな}。17歳。彼女は10年前に東京の上野病院で無痛症と診断。以後通院中。住まいは東京都上野区です」

俺が知りたかった彼女の名がそこにはあった

「桃原空奈・・・」

それが彼女の名前

「たぶんこの方が被告の名前ですね」

王間さんは呟いた。

「でもどうやって？」

「私、こうみえてハッカーなんです」

彼女はいつものように表情を変えずに言った。

「ハッカー？」

オタク弁護士の下にはハッカー大学生かよ？社会ってこんなに変わり者が多いのか？

「さっきあなたのお陰でタグとファイル番号、それに暗証番号も判りました。」

ああ、だからパソコン画面を覗いていたのか。それなら納得だ。いや納得しちゃダメだ。あんたのしてるほうが重罪じゃないのか？

「一応彼女の詳しい住所も調べときますから今日は一旦事務所に戻りましょう？時間も遅い事ですし」

「いや俺はもう家に帰らないと・・・」

あつ、親は俺が今九州にいるって思ってるんだっけ？

「今日は、事務所の方で泊まって下さい」

「でも制服のまんまだし・・・、やっぱり家に帰って着替えたいですよ」

「問題ありませんよ。誰もあなたみたいな人見ていません」

心にグサリと何か刺さった気がした。

「では行きましょう」

こうして俺達は事務所に戻った。

事務所に戻ったのはもう夜の11時過ぎ。

事務所には明かりが灯っていた。やべえ、そういえば明かり消し忘れてた・・

「大丈夫です。事務所はいつも電気、点けっぱなしですから」俺は不思議に思いつつ、事務所の中へと入った。

「おかえり〜、冬美！はじめちゃん！」

夜井さんはピンク柄のパジャマ姿でお茶を飲みながらゆったりとテレビアニメを見ていた。てか俺の呼び名は『はじめちゃん』かい。

まあ実際、悪くはないけどさ

「で収穫は？」

夜井さんは俺に聞いてきた。

「あの娘の名前は桃原空奈。俺とはタメで、東京の上野に住んでいたらしいです」

「ふ〜ん、初めてにしてはなかなか良い仕事したじゃない？」

夜井さんはニヤリと笑った。

「冬美はどう？あいつとは連絡取れた？」

「いえ、とれませんでした。家にも行っただんですがいませんでした」と答える王間さん

「『あいつ』って誰ですか？」

「あなたと同じ仕事仲間よ。それはともかく仕事の話は明日するから皆でおでん食べましょうよ」

俺はテーブルに置いてあるおでんを見た。どう見ても下のコンビニで買ってきたおでんじゃないですか？もしかして夜井さん、自分で料理出来ない人？と思いつつも、俺は食べる事にした。

「私は疲れたので先に休みます。夜井姉さん、はじめ君、今日はお疲れ様でした」

そう言い残すと王間さんは事務所内にあった階段で上に登っていった。

「あれ？王間さんの家ってこの上なんですか？」

夜井さんは熱々玉子を口に入れたまま

「そうよ。私はこの建物の二階に、冬美は三階に住んでるの」
口に入れたまま喋るなよ

「きゃあ！！やっぱりこのアニメ中々良いわね。特にこのランチちゃん！可愛くて仕方ないわ」

夜井さんはテレビの中で動き回る美少女を右手で指しながら喋りだした。おでん食うかテレビ見るかどっちかにしろよ・・・

「はぁ・・・俺はあんまりこういうの好きじゃないですけど・・・」
俺の言葉に夜井さんは目を丸くした。まるで俺を人間じゃないかのように見られた

「あんだ、もしかしてアニメ嫌い？漫画も？」

「いやそこまで毛嫌いしてませんよ。漫画もアニメも。ただ、なんというか、いかにも子供が見るに耐え切れない表現というか、セクハラチックなのがダメというか・・・」

言葉に迷う俺を夜井さんは一喝した。

「あんだそれでも男なの？！いい？この情報社会はね、絵画的記号文化つまり・・・」

わけがわからない話を聞きたくはなかった俺は出来るだけ思考を止め、おでんを口の中にほうり込んでいた。

おでんを食べ終わると夜井さんは

「疲れた」と言い残し、四階にある彼女の部屋へと上がっていった。
俺は事務所内にあるソファアを寝床にして、電気を消し、寝る事にした。

暗い部屋の中、事務所の窓から俺は外を見て考える。最近、夜になると例の事件の現場を思い出してしまうのだ

初めて見た人の死体。

その近くにいた血だらけの少女

その娘の名は桃原空奈

俺はいつになったら、この事件は解決出来るのだろうかという不安と疑問が入り混じった気持ちを落ち着かせるかのように眠り込み始めていた

そして朝がやってきた

第七章「犯人の名前」

「おはようございます、はじめ君」

下から降りてきたのは王間さんだった。

服装は昨日着ていたものと同じ。室内にもかかわらずニット帽を被っていた。目は充血していて眠たそうでもある。

「おはようございます。王間さん。あの、朝食作ったんで良かったら食べてください」

俺は味噌汁に御飯と納豆、焼き魚、玉子焼きという定番な日本の朝食をテーブルに並べた。

「はじめ君、見た目より随分料理が出来るんですね？」見た目は余計ですよ・・・確かに料理出来なさそうな顔してますけどね・・・

王間さんは俺が朝早く起きてしまい、とてつもなく暇だったので作った朝食を黙々と食べ始めた。

「今日ははじめ君、夜井姉さんと一緒に仕事して下さい。」

「仕事って今度は何を調べるんですか？」

「決まってるじゃないですか？犯人ですよ」

王間さんは眠たそうに俺の質問に答えてくれた。

確かにあの娘を救うには犯人を捕まえて、無実を証明すればいい話なのだ。ただそう簡単には出来ない話なわけけど・・・

「おはよう。みんな」

夜井さんが上から降りてきた。仕事服である黒いスーツを着ていた。準備万全のようだ。

「おはようございます。例の書類、全部片付けときましたから」

「ごめんね、わざわざ徹夜にさしちゃって」

「大丈夫ですよ、今日は午前授業なしですし。」

私は朝食食べたら寝る事にします」

「わかったわ。」

夜井さんはテーブルの上にある朝食に目を向けた。

「へえ、おいしいそんな朝食じゃない？はじめちゃんが作ったの？まあ私が作った方が断然うまいけどね」

料理が出来るなら自分の事務所ぐらい片付けられる立派な女性になれよ

朝食を食べ終わると王間さんは夜井さんにさっき話していたファイルを渡し、事務所の上が上がっていった。

夜井さんは中をバラツと確認し、何かを理解したようだ

「さて、まず現場に行きましょう」

事務所を出たのは朝9時過ぎ。

王間さんは今日は一日中寝るそうだ。

俺は事務所の外に出ると赤い高級スポーツカーがそこには置いてあった。

どこでこんな高級車を出してきたのか俺には全く理解出来なかった
ので夜井さんに質問したら

「私は四次元ポケットを三枚もあるのよ」
と誤魔化されてしまった。

車が道をひたすら走らせる間、俺はふと心にひっかかっていたある質問をする事にした。「夜井さん、一つ聞きたい事あるんですけどいいですか？」

「なあに？彼氏は募集中よ？」

「そんな事じゃないですけど、どうして夜井さんはこんなに人のために頑張れるんですか？？」

あまりにも失礼な質問だとわかっていたが、俺他人様のためにそこまで頑張るのが面倒くさいと感じてしまう。いちいち人にかまっていたら、時間がないものだ。でも夜井さんは俺のために、いや他人のために頑張って助けようとしている。夜井さんは俺の人生の中でも珍しいタイプの人なのだ。

車内は俺の一言でしばらく沈黙になったが、

夜井さんはしつかりその重い口を開けた

「じゃあ、あなたは何故あの娘、桃原空菜を助けるの？」

「それは・・・」

「好きだから？頼まれたから？あなたの答えはどちらでもでしょ？私 はね、人間っていう生き物が大好きなのよ。そりゃ嫌いな人もいるし、憎たらしい時もある。だけど人に頼まれたり、助けを求められたりしたら、私は必ずその人を全力で助けようと思ってるわ。私は人を助ける事によって自分がここで生きてるって実感出来るのよ」

夜井さんは笑って言った。

「あなたも近いうちに分かるわ」

俺はいつ理解出来るのだろうと考えてしまった。

「さあ、着いたわ」

公園に着いたのは10時5分。近くに車を停めて俺達は立ち入り禁止のテープを無視して公園の中に入った。

この公園は広く、周りは森に囲まれていて、遊具もしっかりしていて豊富だ。この公園から家が近い俺は小さい頃、よくここで遊んで

いた。ただ、高校生になつてからは初めてだけど。

砂場があるのは公園の中央に位置している。砂場の砂がすつぽりなくなっている。

「警察が犯人の髪の毛とかがないか探すために全部砂は回収したのよ」

横から夜井さんが話しかけてきた。

「それで何かわかったんですか？」

「出てくるのはただの血が混じった砂よ。見つけるのは至難の業」

俺は空っぽになった砂場を見つめた。

「さて、ここに来た理由は現場検証。」

あなたが事件の日に見た事、感じた事を全部話して」

「そう言われても、前に話した通りですよ」

「なら私から質問させてもらうわね」

「あなたは事件の日、悲鳴を聞いてこの公園に入った。そしてここで死体と桃原さんを見つけた。それからどうしたの？」 「死体見るのって初めてで、驚いてただ黙って見てました」

「空菜ちゃんは??」

「彼女も黙って死体を見ました」

「つまり二人とも腰抜かしちゃったのね？」

「はい・・・」

「じゃあ、いつ警察を呼んだの？」

「いや、俺じゃなくてパトロールしている警察官が俺を見つけて呼んでました」

俺はこの事を言った時、心に何かが引つかかったと感じた。なんでだ？何かおかしいぞ・・・。

「あなたは実際、危ない状況にいたのよ。」

そうか、夜井さんの言葉で俺は理解した。

「そのパトロールしてた警官が・・・」

「真犯人の可能性が高いのよ。この公園は夜だと公園の外から中を見ても木々に囲まれているから、見る事は出来ないの。見るには入

口と出口から入らないとしつかり確認出来ないのよ」

「つまりその警官は公園にずっと隠れて、俺達を見てたんですか？！」

「そういう事になるわね。まさかとは思って、昨日の夜、冬美に県警のパソコンにハッキングしてもらって、事件の日の出勤記録、パトロール記録、事件に出勤した人の名前と顔を調べて、アリバイがない人が三人該当したのよ。これ見てくれる？」

夜井さんは俺にファイルを渡した。そこに警察官の服装をした男が三人。

「わかる??」

俺は必死に思い出していた。俺は必ず顔を見たのだ。確かその人は・
・・・・・・・・・

「・・・メガネをかけてました。

優しく声をかけてくれた人です。」

「はじめって良い記憶力してるわね。あなたのおかげで一步真実に前進よ！」

三人の警察官のうち、メガネをかけていたのは

「車山敏・・・」

俺は犯人の名前をまたつぶやいた

「じゃあ会いにいくわよ」

夜井さんはニヤリと笑った。

第七章「犯人の名前」（後書き）

都合上で一時的に休載して申し訳ないです
読んでくれたら幸いです

第八章「親友」

俺達は千葉県警察署に向かう事になった。そこで車山は千葉県警察署で働いているらしい。

俺は夜井さんが走らせる車の中で事件のファイルを眺めていた。殺されたのは土井薫、28歳。職業は警察官で少年犯罪対策課で勤務。仕事熱心で正義感が強く、近いうちに刑事に昇格をする予定だったそうだ。

事件の日は昼から巡回に出たまま、行方不明になっていたらしい。発見されたのはその日の夜。死体になって発見されたわけだ。死因は絞殺。ロープの跡が首に残っている。この点については俺は驚かされた。俺はてっきり刺殺されたものだと思っていた。つまり、絞殺された後刺殺されたわけだ。

相当恨んでいたのだろうか・・・。

次に俺は今から会いに行く車山敏のファイルに目を移した。

車山敏。28歳。交通安全課に勤務。真面目な人できちんと仕事をこなしている人らしい。事件の日、この人も昼から巡回しに行っている。しかし、ちゃんと夕方頃には巡回を終え、また夜に巡回と、仕事熱心な感じが印象づけられる。

「なんで、車山は土井さんを殺したんだろう・・・」

「知りたい？」

隣で運転している夜井さんが俺の独り言に反応した。

「当たり前じゃないですか?!人を殺すにはそれなりの理由がありますよ」

「じゃあ久々に『彼』に頼みもうかな？」

「『彼』って誰ですか？」

「私の仕事仲間よ。あと一人いるのよ」

「えっ?!まじっすか?てつきり夜井さんと王間さんだけで仕事し

ていたと思ってましたよ」

「私一人で弁護士の仕事は難しいの。せめて五人以上は必要なんだけど、私が気に入った人しか置かないから、全然、人いないのよね」
あんたのわがままのせいじゃなかよ……。でも気になるな。

『彼』って。

変なオタク美人弁護士、知的ハツカー大学生の次か……。

「さあ、着いたわよ」

気が付いたらもう警察署に着いていた。

「はじめちゃんは、マザコン刑事に会って車山から話を聞かせてほしいと頼みなさい。私は『彼』にちょっと依頼したいから」

「いや、待つて下さい！何で俺が……」

「アルバイト中でしょ？」

「はい……」

「大丈夫。ちゃんと私もすぐに行くわよ。」

俺は仕方なく、夜井さんから事件のファイルを渡され、先に車から出て警察署の中へと吸い込まれた。

—警察署内—

俺は受付で風岡刑事を呼んだ。

「荒波くん」。

どう？（笑）上手くいってるかい？」

「まあまあですよ。あの、頼みたい事があるんですけど……」

「なんだい？」

「交通安全課の車山さんと話したいんですが……」

「何を話すの？」

「それは……」

「大丈夫だよ！僕は君の味方なんだからさ」（笑）聞かないでおい
てあげるよ。交通安全課の車山ね。了解！ここの二階に談話室があるからそこで話しなよ」

俺は風岡さんの言う通りに談話室で話す事にした。

― 警察署内談話室 ―

「夜井さん、遅いなあ……。すぐに来るって言ってたのに」

俺は一人で談話室にいた。風岡さんは車山を呼んでいる。

俺はだんだん、かなりの不安が心の中で渦巻き始めた。今から真犯人と話す決まると怖くてたまらない……。

だって、そうだろう？ 相手は殺人犯かもしれない。

そうなら、下手な事したら何をしてくるか分からないのに……。俺は夜井さんがなんとかしてくれるのだろうと思いついていた。しかし、この状況は俺自身がなんとかしてはいけないのだ。

「お待ち。荒波君。こちらが車山さんだよ」

ドアから風岡さんと車山が入ってきた。車山はきちんと制服を着て正に警察官という感じだ。背は俺より少し大きい。体格はがっちりしていて、眼鏡をかけているが、似合っていないな。

「はじめまして。荒波一君」

「どうも」

「じゃあ僕は用事があるから（笑）」

と風岡刑事は部屋を出ていってしまった。あの野郎……。俺をとんでもない状況に置きやがった……

車山は挨拶をすますと椅子に座り、話を切り出した。

「君は警察官殺人事件の時の……」

「はい、助けてくれてありがとうございます」

「いや、警察官の仕事として当然の事をしたまでだよ。それで今日は私にお礼にきたのかい？」

「いえ、聞きたい事があつてきました」

この時、俺は覚悟を決めた。あの娘。桃原空菜さんを助けるために・

「聞きたい事？」

「あなたは事件の日、何をしましたか？」

「別に仕事をしていたよ。何故君がそんな事を聞くんだい？」

「僕はあなたが犯人だと思っています」

俺はなんてバカ正直に言ってるんだろうと心で嘆いていた。

「君ね、大人をナメるのも・・・」

「質問に答えて下さい。お願いします！」

俺は車山の話を遮って頭を下げた。

「・・・仕事をしていたよ。あの時は交番での仕事があつたから忙しかつたのは覚えてるな。聞きたい事はこれでいいかい？君ね、私が犯人とか失礼な事を言つてはいけないよ」

「はい・・・。気をつけます」

俺はふと車山の手を見た。指にはマメができているのだろうか。絆創膏がたくさん貼られていた。

「どうしたんですか？その指？」

「ああ、これは仕事でね・・・」

「仕事？」

「力仕事みたいなもんだよ」

何かおかしいな。そんな指がマメになるほど何をしていたんだ？

「もう話はすんだかい？私はこれで失礼するよ」

車山は立ち上がった。

「待ちなさい」

ドアから夜井さんが入ってきた。

「夜井さん！」

「ごめんね、迷子になってたわ」

「大事な時に何やってんですか？！」

「しょうがないじゃない。迷うもんは迷うもんよ」

「あの・・・あなたは？」「失礼しました。車山さん。私は弁護士
の夜井と申します」

「君も私を犯人と訳がわからない事を言うのかい？私はずっとアリバイもあるんだよ」

「なら、その手のマメは何ですか？」

「これは仕事で・・・」

「何の仕事ですかね？しつかり説明してもらいたいわ。」

「警察官は下働きの多いんだよ」

車山さんはいらしながら言った。

「分かりました。質問を変えてあげます。あなたは殺害された土井さんと高校の同級生だったんですか？」

「それは・・・」

車山は驚いた顔で夜井さんを見た。

「嘘についても無駄ですよ。調べれば簡単に分かる事。しかも大学も同じで、警察学校も同期生。土井さんを知らないですよね？」

「・・・」

沈黙が部屋の中で続いた。

夜井さんとはとてもない人だ。あっさり立場を逆転させ、警察官を尋問している。しかも車山が土井さんと同級生の情報には俺もびっくりした。どこからそんな情報を手に入れたんだ？

「土井は私の親友だ。土井を殺したやつを私は許さない……。帰ってくれ。君達に話す事はないんだ」

車山は苦しい顔をして言った。

夜井さんは言葉を聞いて何か考えた表情を見せた。

「わかりました。あなたの頼み通りに帰りましょう」

「夜井さん！何言ってるんですか？！」
「はじめ、帰るわよ」夜井さんに鋭い目で睨まれ、俺達は仕方なく帰る事になった。

警察署内から出た俺は夜井さんに不満をぶつけた。

「なんで帰ったんですか？！あの人絶対何か隠してますよ！」

「あのタイプの人はね、決定的な証拠を見せないと口を割らないのよ」

「証拠？決定的な証拠なんて見つかるはずないじゃないですか？！手がかりもないのに・・・」

「手がかりならあなたが見つけたじゃない？」

「俺が？何を？」彼の指のマメよ」

「指のマメ？？」

「いい？この事件の謎は何故、あの公園なのか？何故、桃原空菜はあの場所で意識を失って倒れていたのか？この二つがキーポイントなの。空菜ちゃんの事はまだ分からないけど、公園の事は説明出来るわ」

「本当ですか？！」

「私の推測にすぎないけど、犯人をまず車山に仮定するわ。はまず彼が土井さんを殺害した後、遺体を隠そうとしたの。でも遺体を隠すのは大変。しかも自分の仕事をしている最中だった。遠出して山でも、川でも棄てようとは普通は思っけど、仕事中は無理よ。

そうになると、自分のアリバイを作るにはどうすればいいか？簡単よ。自分の職場の近くに死体を隠せばよかったの」

「そうか。それなら、アリバイが作れる。じゃあ車山が勤務している警察署の近くに？」

「それが風岡に聞いたんだけど彼、つい最近交番での仕事に戻りたいと志願して交番勤務になったの。しかも例の公園の近くでね」

「でも土井さんの死体はもうバレてるじゃないですか？発見されないように隠そうとしたんですよね？」

「彼が隠そうとしたのは彼が犯人と言える決定的な証拠よ」

「じゃあ公園にその証拠が・・・」

「あるわね」

「待って下さい。結局、車山さんの指のマメとこの公園の事とどう関係しているんですか？それに公園って言ってもあそこは結構広いですし、そんな証拠らしいものなかったですよ。

埋めたんじゃないし・・・」

俺は自分の言った言葉によって理解された

「まさか証拠を埋めたんですか？」

「そう！埋めたのは彼を犯人と決める決定的な証拠を埋めたのよ。しかも相当な力仕事をしてね。その時になれない事をして指にマメを作ったんでしょ」

「でも、何故マメを作ってまで埋めたんですか？それに埋めなくても捨てたり出来るじゃないですか？」

「そこが私の中でひっかかってるのよね・・・。仕方ないわ。証拠発掘にでも行きましょう！」

「今からですか？！」

「今からよ。夜になったら面倒だし、今から一仕事、頑張りましたよ
うね」

「マジっすか・・・」

「さあ行くわよ。」

俺達は車に乗り込み、例の公園に再び向かう事になった。

第九章「狂喜」(前書き)

誤字、脱字が多いと思いますが、読んで理解してくれたら幸いです。

第九章「狂喜」

俺達はまず日曜大工専門店のホームセンター『ホリデーワーク』に寄ってシャベルを二つ購入した。さすがに素手で証拠を掘り出すのはキツイと思うし、時間がかかり過ぎると俺の提案で購入が決定した。

再び公園に着いたのは夕方の4時20分。俺達は公園の前に車を停めた。車からシャベルを持ち出し、立ち入り禁止のテープを無視して入っていった。

「もう夕方か・・・」

「早く発掘しちゃいましょう?」

夜井さんは楽しそうにシャベルを振り回している。危ないっすよ! 止めてください!」

「けち」

何が『けち』だよ?!じゃあシャベルを振り回す事を許可するべきなのか?!

夜井さんが大人か子供か分からない時があつてたまらないな・・・。

俺が拗ねていると、夜井さんが慈悲の目をしてきた。

俺は面倒なので話題を即座に変えた。

「そつえば結局、何処を掘るんですか?」

「たぶん、あそこよ」夜井さんが指したのは事件現場である砂場だった。

「あそこの砂場の砂は空っぽじゃなかったですか?」「はじめは固定観念にとられすぎよ。なんでもかんでも決めつけてはいけないわ。確かにあの砂場の砂はない。だけどその下には、しっかり赤土

を敷いてあるじゃない？」

確認してみると砂場の砂はなく、残っているのは赤土だけだ。今朝来た時、その事について俺は一切考えてはいなかった。ただ砂場の砂がないという事しか見ていなかったのだ……。さすが夜井さんだな。

「さあ、掘ってみましょう？」

「はい、頑張つて掘り出しましょう」

俺達は砂場の赤土にスコップを突き刺した。

どれくらい時間が経つたんだろう。

掘るという作業は案外、重労働だった。赤土は予想以上に固く、一つ掘るのにかなりの力が必要だ。車山がマメを作った理由が理解出来た。問題はそれだけではない。何を掘ればよいかも分からず、どこまで掘ればいいのかも分かってないので、この作業は難航をきわめた。

しばらくして、掘る作業に夜井さんは途中で飽きてしまつて、ベンチでのんびり煙草を吸い始めた。俺が掘ってくれと夜井さんに頼んだら、夜井さんが何か思いついた顔をして、突然近くのコンビニに行つて、二人分の弁当を買つて来やがった……。

腹減つてからイライラしてるわけじゃねえよ！頼むから仕事してくれ！

「はあ……」俺はため息をつきながらも、黙々と作業をした。

空はだんだん暗くなり夕方か夜になりかけていた。

その中、俺は必死に汗水流して掘り続けていると、ついに何か硬い物にぶつかる音がした。

「夜井さん！来て下さい！」

「どう？何か見付かった？！」

ベンチで眠りかけていた夜井さんが駆けつけてきた。

「待って下さい」

俺はスコップを置き、慎重に手で赤土を掻き分けた。

そしてある物が見つかった。

青いビニールシートで包まれた大きな物だった。ヒモが巻かれて大きさは160センチから170センチぐらいのものだ。中身は何だろう？

俺は砂場から無理矢理引きずってそれを出した。ものすごく重い・

「疲れた……。何だろ？これ？じゃあ夜井さん、早速開けちゃいますね？」

「駄目よ」

夜井さんは厳しい顔つきで俺を止めた。

「その中、死体よ」

「……………」

俺は固まってしまった。いや死体って……

「何の冗談ですか？死体なわけ……」俺はそのビニールシートから白い腕が飛び出しているのに気付いてしまった。

「うわぁ？！……！」

俺は何が何だか分からず、驚いてその場に座ってしまった。

どうしてこんな所に死体が埋まつてる？なんで？誰が一体こんな事を？まさか……？

「やっぱり見つかってしまったか・・・」

突然、木の影から声が聞こえた。

最悪にこの状況で一番聞きたくない人の声だった。

「車山さん・・・？」

車山の顔はあの優しそうな顔とは程遠いものになっていた。鬼の形相と言うべきか。右手には警棒を手にしている。

「君らを追いかけて本当に正解だった。怪しいと思ったんだ。完璧な私の予測は外れないものだな」

車山は笑いながら言った。

「やっぱり、あなたが土井さんを殺したのね？しかもこの人も・・・」

「そうだ。二人とも私が殺したよ。私から何でも奪って楽しんでいたあいつと私の愛を気付いてくれない女もな！」

「女？どういう事？」

「まあ、待て。私が殺したかったのは土井だけだったんだ。しかしそれには餌が必要だったんだ」

「エサ？」

「君たちが今目の前にいる死体だよ。それは私にとって、土井にとっても大切な存在だった。ただ何故、『彼女』がこの完璧な私より土井を選んだのが私には理解が難しい。この事を聞くと、いつも嫌な表情をするんだ。私より土井を愛した『彼女』は非常に憎かった」

「それであなたは土井さんを殺害するためにあなたが好きなその『彼女』を殺したの？」

夜井さんは厳しい表情で車山を睨みつけた。

「君の言う通りだよ。私は土井を殺す計画を立てた。だが土井は用心深く、隙がない。それなら隙を作るしかないと思い、『彼女』を殺す事にしたんだよ。いくら土井でも愛している人がいなくなれば

必ず隙が出来るからな。

まず最初、『彼女』を深夜、ここに呼び出した。ここは昔『彼女』と私でデートした思い出の場所だからね……。『彼女』は最初来るのを嫌がったけど、土井についての大切な話があるって嘘言ったら、ちゃんと来てくれたんだよ。バカ正直な女だった。

そして次に私はしっかりと私の愛の気持ちを『彼女』に伝えようと思った。もし『彼女』が良い返事をしたら、死なずに済んだのに。

『彼女』はギヤアギヤアとうるさく私を拒否してきたんだ！私は心の中で怒りが渦巻いたさ。

だから私が首を絞めて楽にしてあげだよ」

俺はそれを聞いてつい堪れず声を出した。

「意味分からねえ！！まるでフラレたから殺したみたいじゃねえかよ！土井さんを殺すためとか言つといて！！」

「うるさい！私はいつでも完璧なんだよ！！完璧な私についてこないあの女が悪い！！」

それに私はあの女を殺した事によつて最高に良い体験をしたんだ。

深夜の死体の埋め立てという作業。スリル抜群さ！誰か通るかわからないという緊張感。完璧な私はこれをやり遂げたけどな。君達は一生涯わう事が出来ないで人生を終えるんだろうな……。悲しいものだ。

こうして私は土井を殺す『エサ』を用意出来たわけ。あとは簡単だった。

彼女を殺してから数日後、異変に気が付いた土井は『彼女』を捜し始めた。もちろん見つかるはずない『彼女』を！もちろん私と土井はある意味親友だから、この話を相談されたさ。おかげで私は土井とさらに深い友情を築いた。

そしてあの事件の夜。この公園に土井を呼んだんだ。『彼女』がここにいて教えてな！そしたら、あいつ、仕事も放つてこの公園にストトンで来たのさ。バカな野郎だ。殺されるとも知らずにな（笑）

確かアイツは必死に、この世にいない『彼女』の名前を叫びながらこの公園内を捜してたな。

そこで私が後ろから忍び寄って、紐で絞めて殺してあげたよ!!!あの時も最高の気分だった!完璧な私だからこそ出来たんだ!しかしその後・・・おつと喋りすぎたかな?まあ、この問題も心配はないと思っていたが、まさか君達みたいなのを呼ぶとは思ってはいなかったな・・・」

車山は何かを悔やんでいるようだ。ぶつぶつと独り言を話し始めた。

「あなたって自分のした事が分かってるの?理解できてるの?」

夜井さんも怒りに耐えきれず言葉を発した。

「うるさい・・・。この完璧な私が理解してるなんて当たり前だ。それと気になっていたが、確かあなたは弁護士だろ?犯罪者を助ける仕事の女が何を言ってるんだ?」

「残念。私は犯罪者を助けたり、見逃そうとはしないわ。ありのままの事実を見極めて、それにあった罪を裁判長につきつけて判決を下してもらう。それが弁護士。それが私のやり方よ。他の弁護士はどうかは知らないけど私はこの信条を曲げる事は絶対にないわ。

証拠にこれ。何か分かる?」

夜井さんの手には携帯が握られていた。

「最新の携帯ってボイスレコーダーがついてるのよ。あなたの驚きの証言が盛り沢山なの!まさか、あなたが自分から自供してくれるなんて思ってもいなかった。それに自分の話に夢中で録音された事にも気付かないなんて(笑)すつと完璧、完璧とか言って・・・

。完璧な人間なんているはずじゃない!!でも完璧なあなたがこつも簡単にも捕まってくれるなんて。私の方が完璧なんじゃないの?!!」

さすが夜井さんと言うべきだろう。彼女はこの状況でこんな方法を

考えるなんて。横にいる夜井さんの顔がとても生き生きしている。ぶっちゃけ言っと、相当頼もしい。

まるで夜井さんは恐れというのを知らないみたいだ。

それに比べ、俺はどうだろう。手が震え、今立っているのも精一杯だ。

夜井さんみたく堂々と胸を張れない。

目の前には殺人犯がいる。今でも逃げ出したい自分がいる。もしかしたら殺されるかもしれないんだ。逃げ出したくなるのは当然だろう？だがこの時、俺は夜井さんのこの行動を見て俺は覚悟を決めた。

俺は逃げない。

こいつを捕まえれば、全てが終わるんだ。彼女、桃原空葉を助けられるんだ。

「バカな奴らだ。今にその携帯の意味がなくなる。何故なら私がお前らをここで殺すからな。私はいつでも完璧なんだ！お前らの方が完璧なんてありえない！！捕まるわけにはいかないんだよ！」

車山はそう呟き、怒り狂った顔で俺達に近づいてきた。まずい！

「はじめ、これを持って逃げなさい……。私は大丈夫だから」

夜井さんが俺の耳元に囁いた。

渡されたのは録音した携帯電話。

「嫌ですよ……。一人では逃げ出したくないです！もし一人で逃げたら、後で必ず後悔します。ここは逃げるが勝ちですよ！さあ、早く逃げましょう！！」

俺はたまらず声をだした。

「はじめ・・・」

「君達、お話は済んだかい？」

車山はもう夜井さんの目の前で警棒を振り上げていた。

「死ね」

俺はその時、咄嗟に反応した。

夜井さんを庇う事に。

夜井さんを庇った俺は振り下げられた警棒が後頭部に当たり、その場で倒れこんでしまった。

『痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い』
という感情が身体全体を駆け巡っていく

「あああああああ！」

俺は痛みを堪えられなかった。

「はじめ！！！！！！」

夜井さんの声が聞こえた。夜井さんが俺を抱えてくれている。涙目の夜井さんが近くで見えるな・・・

「はじめ！しっかりして！はじめ！」

「バカなガキだ。女から殺そうと思ったのに。大丈夫。心配しなくても。しっかりと君も殺してあげるから！」

車山は狂喜している・・・

駄目だ。夜井さん、逃げて・・・

「待てよ」

突然公園の入口から声がした。男の声。俺は途切れそうな意識をなんとか叩き起こして、その男を見た。黒いスーツに白いシャツ。金色のネックレスをつけている。まるでホストだ。顔はかなりの美形で髪は銀髪。煙草を吸っていた。

「夜井の姉貴。ちゃんと公園の名前くらい教えてよ。捜すの少し面倒だった」

「バカ！遅いわよ！この状況理解できるでしょ？はじめちゃんが・・・」

「はじめって誰さ？」

あつ、そいつね？大丈夫だよ。出血も酷くねえし。すぐ喋れるようになるさ」

「誰だ？！！」車山が怒り狂った調子で聞いた。

「俺？俺の名前は神原進士。お前がムシヨの中で一生恨む名前だよ」

「ふざけるじゃない！このクソガキが！！私は柔道をやっている黒帯を持っているんだ。格闘技も完璧な私に勝てるわけないだろう？」

「つべこべ言わずに早くかかってこいよ。俺は喧嘩したくてたまらないんだよ、ハゲ」

「ハゲというなああああ
あああああ！！！！！！！！！！」

車山は警棒を振り回しながら、神原に襲いかかった。神原はしっかりとそれを右によけ、カウンターの右フックを車山の顔に打ち込んだ。

「あゝ！」「ぎゅー」

車山は何本かの歯が折れただろう。口から大量の血が出る。

「ハゲのおっさん。遅いよ。柔道なんだろう？ハゲがそんな武器使うなよな……」

車山は悔やみながらも警棒を捨て、柔道の構えをとった。

それに対して神原はボクシングのスタイルで構えていた。

そして車山が前に飛び込んで神原の服を掴もうとする。神原はそれよりも早く左ジャブを相手の顔に当てた。

そしてトドメの右ストレートをまたも車山の顔にクリーンヒットさせた。

見事なワンツーだ。

車山は立つのもやっとの状態になっている。

「くそお！くそお！この完璧な私が！！！」

「夜井の姉貴やガキにしかテメエは威張れねえのかよ……。まじ腹立つぜ!!」

今度は神原から車山に左ジャブの連打をうつ。車山は必死にガード、神原が強力な右ストレートを放ち、必死にガードしている車山のバランスを崩す。

そして・・・

神原はりバーに左フックを入れ、車山はついに、その大きな身体が地べたに倒れこんだ。

「うっうっ……」

「立って逃げ出してみろよ。リバー叩いたからしばらくは動けねえし、頭もくらくらしてるだろう？あんたの仲間の警察さんにも、連絡したからあともうちょっとで来てくれるぜ」

神原は煙草を吸い直しながら夜井と荒波の傍に行った。

「夜井の姉貴。言われた通り、車山敏の学生時代、特に高校の対人関係を細かく調べた。車山は高校時代に一年以上付き合っていた女性がいたんだ。」

その女性の名前は『桃原遥奈』」

「……も……もは……ら？」

俺はその名を聞いて、必死に口を動かした。桃原？どういうことだ？？まさか土井が言ってた『彼女』って……？

「はじめ！大丈夫？！しっかりして。今、救急車が来るから」

夜井さんが心配そうに見ている。

公園の外からサイレンの音が聞こえ始めた。

何故か俺は急に眠たくなってしまった……。気を失いそうなのを歯を食いしばって我慢したせいかな？？くそ……。聞きたい事があるのに……。

そして俺はついに我慢できず目を閉じてしまう。

目を閉じると、様々な音が聞こえては消えていく気がした……。

その時、最後に覚えている音は

誰かの『ありがとう』

だった。

第十章「指輪」

俺は、ゆっくりと病院のベッドの上で目覚めた。真っ白な天井が初めに目に飛び込んでくる。それと同時に頭がズキズキした……。まだ俺の頭はちゃんと動いてなくて、一つ一つの頭のスイッチをすぐに起動させるのには時間がかかってしまった。

「そっか。あの後、病院に運ばれたのか・・・」

どうやら病院の一室で周りには誰もいない。俺の個室らしい。

外を見ると春らしい青空とのどかな住宅街の風景が広がっている。今は昼時かなと思いつつ俺がぼーっと窓を見ているとノックが聞こえドアが開いた。

入ってきたのは桃原空菜だった。

「怪我は大丈夫?」と心配そうな顔をして俺に話しかけた

「えっ・・・あ・・・その・・・えっと・・・大丈夫だよ・・・」

突然の出来事だったので俺はびっくりしてしまい気が動転してしまった。

何で彼女はここに?

彼女はクスリと笑ってベッドの横の椅子に座った。

俺はふと高校生には必ずよくある感情に至ってしまう……。めっちゃめっちゃ可愛い。ふと香る甘い香りに驚いた。俺の人生の中でまだ女性と付き合った事がなく、若者の青春らしい青春は送った事はな

かった。もしかしたら、俺にも満開の春がきたのか??この子も
しかして俺の事・・・

「どうしたの?」

「え?!いや、何でもないよ」

危うく妄想の世界に飛びこもうとしてた・・・。

「そういえば、何で君はここに?」

「君と話がしたくて・・・迷惑だった?」

「とんでもないよ。俺こそ君と色々話したいし」

そうか。案外、俺と桃原空菜がちゃんと話したのはこれが初めてなのだ。

「ありがとう。君のおかげで私、色々な事を思い出したんだ」

「・・・えっ?!思い出したって・・・もしかして記憶が戻ったの?！良かった!！記憶が戻らなかつたらどうしようって思ったよ。でも、何で俺のおかげなの?」

「私が記憶がなくて警察に保護されてた時、夜井さんという人があなたの紹介と言って私に訪ねて来てくれてね、私にある写真を見せてくれたんだ。そしたらちよつとずつだけど、色々な事を思い出したの」

「夜井さんが・・・」夜井さんに精一杯のお礼がしたいと思った。

「ある写真って?」

彼女は自分の財布の中からその写真を出して俺に見せてくれた。

「私が大好きで大切な家族の写真」

写っていたのは彼女と年が若い夫婦。

「・・・私と姉さん、それと土井兄さん」

「土井兄さん??土井って・・・?!まさか・・・」

「やっと起きたの?はじめ、心配したじゃない?!」

突然、ドアから夜井さんと王間さん、さらに知らない男の人が入っ

てきた。誰だろう？？俺の知り合いにジャーニーズ系の美男子はいないはずだけど・・・？

「よう！坊主。元気になったか？」

「はい。もう大丈夫です。えっと・・・」

「神原進士。覚えてないかい？ほら？オメエと夜井の姉貴がピンチの時にカツコよく登場したじゃん？」

俺はあの体験をうつすら思い出した。確かに俺は誰かに助けられた覚えはあるけど、この人が俺達を・・・

「あの時は本当にありがとうございます。あの時はどうなるかと思いました。神原さんのおかげで助かりました」

「何、堅い挨拶してんだよ、坊主？

てかお前さ、可愛い女子を病室に連れ込んで何する気だったんだよ？このスケベ」神原さんが顔に似合わない大笑いをしながら俺の肩をポンポンと思いつき叩いてきた。

「意味分らないですし、めっちゃ痛いんですけど・・・」

叩かれながら俺は、この人も何かおかしいオーラを持っているなと確信した

「彼は私の事務所の社員。情報屋とボディガードの仕事をしてもらってるのよ」

夜井さんが後付けしてくれた。

「じゃあ、夜井さんが警察署で電話してた人が神原さんですか？」

「そうよ。事件の事を色々調べてもらってね。おかげでこの事件の全貌が分かったの。そこであなたはこの事件に少なからずだけど関りを持ってしまっている。同時に知る権利もあるのよ。どう？知りたい？」

「もちろん知りたいです。教えて下さい」

「わかったわ。そして空菜ちゃん。あなたにとっては今から話す事は苦しいものになる。だから今までこの事件の話をおあなたにできなかったわ。あなたが嫌ならこの場を外しても大丈夫よ・・・」

「大丈夫です。警察の人も私には話してはくれなかったですし」
「れなかったですし」

「わかったわ……。車山は二人の人を殺している。その二人は土井薫と桃原遥奈。二人は籍は入れてはいないけども、事実婚だった。動機は簡潔に話すと嫉妬。この三人は高校時代を共に過ごしていて、車山は空菜ちゃんのお姉さんと付き合っていた証言を友人から聞いているわ。」

「流石だよな俺。徹夜続きでその友人を探したんだぜ？このイケメン探偵だからできたみたいなんだよ（笑）」
神原さんがタバコを吸いながら口を挟んだ。
ここ禁煙ですし、イケメンは関係ないです。

「黙らないとクビよ。神原君？あんた仕事はいいのに自分の事ばかりじゃない？悪い癖よ」

「すみません……」

さすが夜井さん。でもまずタバコ注意しろよ……。

「とりあえず、3月29日に桃原遥奈はあの公園で殺された。殺害方法は絞殺。考察すると事前に計画されていたみたい。縄も用意してたわけだから。そして死体にビニールシートを巻き付けて、さらに凶器の縄で結びつけて砂場に埋めた。殺害現場付近の深夜は全く人が通らないし、いないから埋め立て作業は上手くいったみたい。見つかったらそこで事件は解決したでしょうけどね。」

次に土井さん。彼も実は絞殺されてたの」

俺はふと疑問に思った。

「待って下さい。夜井さん。土井さんはナイフで頭と胸の二ヶ所刺されて死んだんじゃない……」

「ここからはあなたが知らない事よ。」

土井さんは車山と話するために近くのレストランに車を泊めていたの。それはある人を連れていたから」

「ある人って？」

「私です」

桃原空菜は俺に向かって言った。

「土井兄さんが姉さんが見つかったと言って私を連れていったの。私も姉さんを捜していたから。土井兄さんは車を泊めて、私は車の中で待つてろって。でも私は我慢出来ず後をついていったの・・・」

「そこで空菜ちゃんは車山が兄さんを殺したのを・・・」

「はい・・・、見ています。それで私は兄さんを助けに行つて・・・」

「

苦しい顔をして彼女は話した。

「いいの、無理に話さなくて。あなたはよく頑張ったわ。あなたは倒れてる土井さんの元へ駆けつけた。けど、後ろから思い切り警棒で殴られたのね。」

それで車山は動揺したの。人に見られた事に。でも車山はある事を思いついた。そう。偽装殺害をね。」

「偽装殺害?？」

「つまり車山は空菜ちゃんを犯人にしようとしたの。車山は空菜ちゃんとは全く関係のない他人と考えたんでしょね。けれども普通の女子が大の男、しかも警察官を絞殺するなんて難しい話だわ。だから殺せる可能性のある刺殺にしたの。」

「でもナイフなんて、すぐに用意出来たんですか?」

「車山は策略家みたいで、もし絞殺に失敗したらナイフで殺そうとしたみたい。しかもナイフを二本。指紋をちゃんと消して持っていたみたいよ。多分手袋もしっかりはめていたでしょうね。」

用意周到って事か・・・。でも

「なんでわざわざナイフを使ってそんな事をしたんですか?」

「それはね。砂場にある足跡を消すため。」

「ここで考えるのは犯行を行ったのが砂場の上。当然足跡が残る。つまり身元がばれちゃうって考えたの。そこで考えたのは血で砂場をめちゃくちゃにしようとした。そうすれば、足跡は見つかりにくくなる。」

「……ってことは……」俺は嫌な汗をかいてしまった。
「もう死んでいる土井さんの遺体にナイフで大量の血を出させたのよ。そうすれば彼女にも血がかかるし、足跡も残りにくくなる。ちゃんと自分に血がかからないようにね。ナイフで刺して血を出せたあとは車山は靴を脱いで、急いでその場から逃げる。けどある問題が発生した。」

「俺が彼女を見つけた事ですか？」

「そう。車山は警察を呼ぶか、迷っていたら叫び声が聞こえる。これは彼女が目覚ましたって事。急いで何も知らない顔をして駆けつけようとしたら、はじめがいた。あとは分かるわね？」

「……」

俺はちらつと桃原の顔をみた。

彼女はそつと涙を流していた。だけど涙を流さないように必死に唇をかみ締めていた。

俺は自分の心にたまっているもやもやを全て吐き出したかった。悲しい。痛い。嫌だ。苦しい。という感情を。こんな気分は初めてだ。彼女はずつと涙を流していた。一人の男に彼女の大切な家族を奪われたんだ。

もし俺が彼女の立場だったら……

と考えたら俺も涙を流していた。

「なぐに。泣いてるのよ。若いっていいわね。はじめは泣くな！男でしょう？いい？あんた私を庇ってくれるくらいの勇気を持つてるんだから。男前の顔が台無しじゃない？」と夜井さん

「あと空菜ちゃん？あなたは土井さんとお姉さんの分、しっかり前を向いて生きなきゃダメ。途中立ち止まってもいい。けど後ろを向いちやいけない。前を向いて生きなきゃね？楽しく生きて？はい、これ。」

夜井さんは桃原に指輪を渡した。

「・・・・・・・・これは？」

「土井さんはあなたのお姉さんにちゃんとプロポーズしようとしてたみたい。これはあなたが大事に持っていてね。」

桃原は涙を止めることをやめて大きく泣いた。

王間さんは少し笑った気がした。

神原さんは大声で笑いながら俺の肩を叩いた。「もう泣かなくていいぜ。よく頑張った。」

夜井さんはぎゅっと桃原を優しく抱きしめていた。

俺はこれで終わったんだと心の中で喜んで俺のモヤモヤした気持ちを和らいでくれた。

エピソード「ライフライブ」

俺は変わらない日常を取り戻していた。

俺の両親は顔面蒼白で病院に駆けつけていたが、夜井さんが何か吹き込んだらしく

「あんた、ある事件を解決したとかで市民名誉賞もらちゃうんじゃない？」と母。

「お父さんはお前がここまで大きくなるなんて・・・感動した！！」と父。

なんて古いネタを引き出して喜んでいやがる・・・こっちは死ぬ一歩手前だったのによ。

まあ心配をかけたのは悪いけどさ。何を吹き込んだんだよ・・・。

突然あの風岡刑事がお見舞いをしにきた。ちなみに夜井ご一行は桃園を連れてどつかへ行つてしまい、最後に桃園に「また今度ね」という言葉を残していった。

・・・それを言われるともう会わない気がするな・・・。

「どうだい？調子は？」

「順調です。明日には退院して、明後日から学校ですよ。」

「学業は大変だね（笑）」

「なんすつか？俺に用ですか？」

「実はね。車山容疑者の弁護士が姫菜なんだ。」

「え？！何であんなやつを？！」

「姫菜は法曹界である意味超有名なんだ。『模範の女弁護士』ってね？わざと凶悪犯の弁護をして検事が重い罪にしようとするの止

めてね。妥当で正しい罪を償うのをモットーにしてる。でもここ最近は今全く仕事をしていなかったんだね。」

「どうしてですか？」

「それはまた今度。用件は終わり。これでさようならって事で（笑）」

用件はそれだけかい？まあ余計な事は今つつ込まなくていいだろうな。

「はい。俺も二度とあんな事件に合わないでしょうしね。」

「・・・それはどうか？」

「はい？」

「じゃあね〜〜〜」と気軽に返事をしていった。

だから何でもみんなそんな意味不明な言葉を残していくんだよ！

「おはよう。荒波。何ぼつとしてんだよ！！」とダチの勝間に突然肩を叩かれた。最近よく叩かれてる気が・・・。

俺はいつもの朝の学校への登校。俺はホントに変わらない日常を取り戻していた。

あの美人オタク弁護士も、ハッカー大学生謙美人秘書も、イケメン格闘家探偵も

そしてあの美少女高校生も・・・。

もう会うことはないだろう。一応助けることが出来たわけから契約は果たしたわけだし。ただこのポツカリ空いたこの気分はなんだろうな？

「お前交通事故にあつたらしいな。それで頭のネジも吹っ飛んだかあ？」学校では俺の休みを交通事故にしたらしい。夜井さんの仕業かな？

「うるせえ！てか学校遅刻するぞ。」

「それはお前もじゃん？」

俺達は急いで学校へ駆け出した。

「はい、席に着いて！今日は大事な話があるからね」

と俺の担任の先生はみんなを席に着かした。ギリギリ間に合った。
・・・セーフ。

「今日はみんなに新しい転入生を紹介します。ご家族の都合により東京から来ました。みんな仲良くしてね。」

「先生！！男？！女？！」とある男子。

「男子諸君喜びなさい！女の子よ！」

男子の歓声と女子の沈黙がクラスを駆け巡った。女子か……。俺は全速力で学校に来たため、正直しんどい……。勝間は……。？勝間はまるで疲れていない顔、てか生き生きしてる。どうしたんだ？まわりの男子もみんなそうだった。てかみんな輝いている顔だ。なんなんだと思っただけで前をむいてその転入生をみた。そこには知っている顔がいた。

「……えつと桃原空菜です。そのよろしくお願いします」と少し照れ気味に言った。

「よし。じゃあ席に座って。じゃあ今日は……」いつもの説明をし始めた。

桃原は俺を見てまっすぐこっちに来た。席は隣ですか？これはまた難儀な展開だな……。

「よろしくね？はじくん？」

「……あ、ああ。」はじってなんだよ。おい？

「姫菜ねえさんがそう言えって？ダメ？」

「そっいうわけじゃないけど……。」

「は、はじつてえつとお二人は知り合い??」と勝間。

「うん!」と桃原の満面な笑み。

「そんなあ~~~~」と男子全員が呟いた。

「そういえばこれ。」と桃原は封筒を俺に渡した。なんだ??
開けてみるとそのなかにはこう一言書いてあった。

ーバイトちゃんとしろー

「今日の放課後、事務所にきなさいだつて。」

「.....」

これはまた新たな展開がきたらしい。バイトの契約はまだ終わってないそうだ。

正直言おう。嬉しかった。変わらない日常ではなくなった。俺はこの展開を望んでいたんだ。
心から。

「ありがとう」

「私こそありがとう。助けてくれて。これからもよろしくね。はじめ」

この日の放課後から俺は新しい日常を始める。この後どんな事に巻き込まれるかも分からないし、事件なんて巻き込まれずに俺の人生は終了するかもしれない。

けど、そんな事はどうでもいい。

俺は

おれは

ただこの人生を楽しみたい。どんな形でも。
そう。

まるで

人生を演奏するバンドのように

完

エピソード「ライフライン」(後書き)

今までこんなに放置してすみませんでした。正直この話を終わらしたくなくただ自己満足で終わらせようと思いました。けどそれは間違っていた事にもきずきました。また誰かが「続きを書け」と言われたら書く気があります。学業と両立するのは難しいですが頑張ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2119b/>

ライフライブ

2010年10月11日16時37分発行